

福山で映画「街のルンペン」を見る。ルンペン、ジントタが、友人が縊死したのを見て泣きながら、「おい野郎、だれの許しを受けて、死ぬなんて贅沢な真似をしやがるんだ。死んで極楽へ行った方がいくらかは俺だつて知っている。だが、しなければならぬことがあるからこそ生きているんだ。野良犬だつて野垂死するまじや生きているじゃないか。」

家もなく、食もなく、仕事もなく、食つたり食わなんだりして、青天井の下、草むら家をとするこの苦闘の中にも、人生の意義に生きようとするジントタの心、人間だ！人間だ！最後の一呼吸まで、ほんとうの人間として生きぬこうとする、その血のたぎりをおいて、どこにほんとうの人生があるか。正しく強い、そして太いこの歩みのなくなつた者は、そして社会は釣瓶落しに没落する。

頼山陽

十月、広島では頼山陽の百年祭が行われた。そして天下の新聞は山陽先生について書いた。

山陽は体が弱かつた。天保三年六月、彦根に遊んで帰つた翌月、十二日肺結核が進んで咯血した。それから後幾度も咯血がつづいて体がめつきり弱つてゆく。死期の近づいたことがわかつた。山陽先生最後の大事業であつた「日本政記」がまだ完成されていない。山陽先生は急がねばならなかつた。七月、八月、八月の八日ごろからは、門弟藤蔭を病床に呼び、口述して筆記せしめ、少しいい日には、起き上つて自ら校正した。涙ぐましい努力がつづいて、ついに『日本政記』はできあがつた。しかし最後の念願の成就した日、天保三年九月二十三日は先生が地上から去らなければならぬ日だつた。

山陽先生は酒を飲んだ。その若い日には父上の怒りさえ買った。だが、三十五才の時、十八才の梨影夫人と結婚された。窮迫の中にも夫をたすけた聡明な夫人が裏にあつたことを忘れてはならない。

山陽先生は先生自らが言うように努力精進の人であつた。天才は必ず努力する。死の日まで『日本政記』の筆を棄てない。かくして不朽の山陽は生まれたのである。

ふしだらなように見える生活、あまりに人間味のある一生、だがその中に、ビューと一貫した意志と努力の流れ、それがその人の一生の価値を決定するのだ。

蘇峰先生の説にもあつたと思う。歴史家としてならば山陽以上の人はある。その漢文はあまりに倭臭味がありすぎる。いったい何が山陽なのか。はつきりとした時の流れの認識である。日本自体をつかんだことだ。そして燃えるような情熱と不動の意志である。一人の山陽が斃れるころ、幾多の山陽が生まれはじめていた。そして明治維新の大業は成就されていった。

何とかいう俳優は、雁次郎その他一流俳優の声色を真似したそうだ。そのことばや声もそっくり真似ることはできる。しかし真似はついに真似であつて、永久にその人

の本質を生かしきることはできない。思想の真似、流行の真似、型の真似、体裁の真似、軽薄なる才子のあまりに多い世の中ではある。

気づかぬこと

風呂に入る時、百人は百人、洗ふべき所を洗う。だが、足の裏を洗う人がほとんどない。足の裏は、足袋でも用いない時はあまりに不潔である。街の銭湯で見ていると、一人も足の裏を洗って湯に入る人がない。

人間よ、仲よくせよ。

人生は永遠に闘争である。内へ外へ正しからざるものへの強い闘争である。

真の闘争は私憤からは生まれぬ。真の人格的自覚による団結の力のみがもの言う。汝の持つ悪感情を、愚痴を清算しされ。

情に流される時、正しい智慧が曇る。正しい智慧が曇る時、正しい強い歩みがなくなる。